

令和 7 年 6 月 18 日現在

機関番号：34407

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2024

課題番号：21K12395

研究課題名（和文）インドネシア人帰還移民の再統合における労働経験の意味 - 移住先での労働者層別分析

研究課題名（英文）The Meaning of Work Experience in the Reintegration of Indonesian Returned Migrants: An Analysis by Worker Stratification in the Destination Country

研究代表者

中谷 潤子（Nakatani, Junko）

大阪産業大学・国際学部・教授

研究者番号：20609614

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：フィールドで移住労働経験者への現地調査と聞き取りに加え、インドネシアにある日本への技能実習生・特定技能の送り出し機関をいくつか訪問することができた。また、インドネシアの看護大学や保健大学が学校をあげて、日本への介護労働者の送り出しを始めているケースが確認できた。調査結果について、2024年2月に東南アジア学会の九州例会、そして2024年7月にはインドネシアスラバヤで開催された国際学会ICASにて、科研メンバーでパネルを組んで発表することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本でも増加している海外からの労働力、日本では「移民政策」はないとされているが、これらの人の動きとそれにとまなう、社会的、経済的状況を知ることは必須である。

特に日本では「技能実習生」「特定技能」という名で受け入れている人たちの定住化に向けて「育成就労」制度がはじまる。定住外国人とその二世の受け入れ体制の整っていない日本社会の課題は大きい。

研究成果の概要（英文）： In the field surveys and interviews with migrant labor experience, we were able to visit institutions in Indonesia that send out technical intern trainees and specified skills to Japan. The sending and receiving institutions, as well as the local nursing and health colleges, were able to learn about the future prospects and challenges. Furthermore, we were able to confirm that reintegration does not only mean returning home and upgrading their former lives, but that the migrant workers have since progressed to various life stages. There were also cases where workers remained in Japan and worked to build an environment for resettlement.

The results of the survey were presented at the Kyushu meeting of the Association for Southeast Asian Studies in February 2024, and at ICAS, an international conference held in Surabaya, Indonesia, in July 2024, by a panel of members.

研究分野：地域研究

キーワード：移民研究 インドネシア

1. 研究開始当初の背景

申請者は 2015 年よりインドネシアにおいて、帰還移民のライフステージ構築について調査を進めてきた。本研究はそれをもとに、帰還移民の再統合に、移住労働経験がどのように生かされるのかを労働層別に明らかにしようと考えた。インドネシアでも官民のレベルで様々なサポートを行い、帰還移民の自立を促す取り組みが行われている。しかしながら、帰還移民の自立への道はいまだ険しい。当事者自身が自立への道を自ら進めるようにするためには意識改革も必要だと考え、調査をもとに、必要な自立支援の在り方を探ろうと考えた。

研究がスタートした 2021 年はまだコロナ禍で、海外調査が思うようにできなかった。そのため研究メンバーと、日本の技能実習生や特定技能に注目するようになった。2022 年から海外現地調査も徐々に行われるようになってき、インドネシアより先に台湾を訪れ移住労働者の調査を行った。その後、インドネシアの現地調査にも行くことができた。

2. 研究の目的

移住労働者が帰還後、自立するために必要なことは何かというのが本研究の問いであった。インドネシア人の移動については、先行研究がある一方、インドネシア人労働者の帰還後に注目した研究は多くなかった。

再統合には、文化的再統合(文化的価値観等の再受容)、経済的統合(経済システムへの編入)、社会的再統合(人的ネットワークの創出など) の 3 つがある (IOM2004:54)。非熟練労働者として肉體労働や家事労働に勤しむ人の多くは家族に送金をする。帰郷しても地元で同等の収入を得ることは難しく、資金が尽きると再び「出稼ぎ」へと向かう。長期にわたる不在は時として、家庭や近親者とのトラブルをもたらすこともある。つまり、経済的統合と社会的統合に課題があるのである。

そこで本研究では、インドネシア人移住労働者の帰還後の再統合過程を移住前、移住中の一連のプロセスを視野に労働者層別により仔細に明らかにしようとした。労働者層別のそもそものポテンシャルとスキルに伴う帰還後の再統合と自立までの過程を解明することで、それに必要な支援の在り方を提言しようとした。

インドネシアの労働者送り出しは、1980 年代半ばから毎年 30 万人近くへのぼり、インドネシア政府も、社会省がもともと労働先で暴力などの犠牲になった非熟練労働者を主な対象として始めた再統合プログラムにさらに力を入れている。さらに女性の自立支援のための NGO が帰還移住労働者への支援につながるというケースも多い。

このような状況の中、労働者の移住前の学歴、移住先での労働の種類とそこで培う技術と経験、さらに帰還後の環境といった複数の変数を視野に、彼らの再統合を多角的に比較分析する必要があると感じる。そこで本研究では、次の労働者層別の再統合の実相と課題について明らかにしていきたい。

参考文献

International Organization for Migration (2004) Glossary on Migration. International Organization for Migration (IOM)

3. 研究の方法

現地調査での経年的なインタビュー調査が中心となる。既に築いているフィールドが多いことから、ラポールを活かし、複数の協力者へ複数回の半構造化インタビューを行う。質的調査になるため、データは量をそろえるのではなく、協力者と深くかかわってきているからこそ得られる深い「語り」を収集することを目的とする。

調査地は、首都ジャカルタとその近郊、ジャワ島東部、スラウェシ島のほか、日本では大阪、名古屋、北九州、東海地方などを訪れた。当初、労働経験者自身へのインタビューが中心になると考えていたが、機関を訪れることができたため、送り出し機関、受け入れ機関、支援団体などのスタッフにもインタビューすることができた。

4. 研究成果

メンバーのフィールドで移住労働経験者への現地調査と聞き取りに加え、インドネシアにある日本への技能実習生・特定技能の送り出し機関をいくつか訪問することができた。また、インドネシアの看護大学や保健大学が学校をあげて、日本への介護労働者の送り出しを始めているケースがいくつも確認できた。

以前より訪問していたフィールドでは、コロナを挟んで帰還後の活動が滞っていないかを知ることが大きな目的であった。これについては、メンバーの予想とは異なり、順調に再統合のために立ち上げた活動が進められていた。周りにコロナで命を落としたりした人がいなかったということも大きいということであった。

また、送り出し機関や受け入れ機関、現地の看護・保健大学では、これからの展望や課題を知ることができた。さらに、再統合とは言っても帰還して元の生活をグレードアップさせるといふばかりではなく、移住労働者はその後、様々なライフステージに進んでいることが確認できた。帰還し、自身が次の労働者を送り出す側になるケース、日本に残りインドネシアからの労働者の受け入れに携わるケースなども確認できた。帰還に焦点を当てたプロジェクトであったが、日本に残り、定住のための環境構築に努めるケースもあった。

これらの調査結果について、2024年2月に東南アジア学会の九州例会、そして2024年7月にはインドネシアスラバヤで開催された国際学会 ICAS にて、科研メンバーでパネルを組んで発表することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山口裕子	4. 巻 94
2. 論文標題 「技能実習生がうまれる時：インドネシア人帰還実習生の同胞リクルートと政府の儀礼的演出」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『北九州市立大学文学部紀要』	6. 最初と最後の頁 143,163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中谷潤子	4. 巻 24-13
2. 論文標題 インドネシア人看護師の日本定住プロセス	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 45-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中谷潤子	4. 巻 47
2. 論文標題 インドネシア人看護師の定住外国人としての「ライフ」のプロセス	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪産業大学論集 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 北村由美	4. 巻 0
2. 論文標題 「『生活報』に見られる冷戦初期のインドネシア華人と中国」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 陳來幸編『冷戦アジアと華僑華人』風響社	6. 最初と最後の頁 284-294
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平野恵子	4. 巻 19
2. 論文標題 COVID-19パンデミック下のインドネシアにおける家事労働者への社会経済的影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際ジェンダー学会誌	6. 最初と最後の頁 32-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平野恵子	4. 巻 50 2
2. 論文標題 有償家事労働の位相から『家政』を考える	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想 (特集 家政学の思想)	6. 最初と最後の頁 79-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 「技能実習生が誕生するとき：インドネシアのある送り出し式典を中心に」
3. 学会等名 岡山大学文明動態学研究所第28回R1DCマンスリー研究セミナー (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 「ポスト帰還移民研究に向けて：インドネシア人エクス・ケンシュウセイの『再統合』のその後」
3. 学会等名 アジアネットワーク研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 「連鎖と内遷：帰還した元技能実習生の『再統合』を中心に」
3. 学会等名 インドネシア研究懇話会（KAPAL）第5回研究大会、シンポジウムB「変わりゆく日本への移住労働：技能実習・特定技能の事例から」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中谷潤子
2. 発表標題 「インドネシアからアジアへの送り出し：語学研修に注目して」
3. 学会等名 東南アジア学会九州地区例会 公開研究会 「インドネシア人帰還移民の再統合：日本と台湾の事例から」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 平野恵子
2. 発表標題 「目的国でハブになるということ：定住したインドネシア人元技能実習生が構築するネットワーク」
3. 学会等名 東南アジア学会九州地区例会 公開研究会 「インドネシア人帰還移民の再統合：日本と台湾の事例から」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 「帰還・起業・技能：インドネシア人元技能実習生の『理想の再統合』をめぐる」
3. 学会等名 東南アジア学会九州地区例会 公開研究会 「インドネシア人帰還移民の再統合：日本と台湾の事例から」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 北村由美
2. 発表標題 「移住労働者が『顔』を持つ時：台湾における移住労働者受入れをめぐる変化を中心に」
3. 学会等名 東南アジア学会九州地区例会 公開研究会 「インドネシア人帰還移民の再統合：日本と台湾の事例から」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中谷潤子
2. 発表標題 インドネシア ベトナム比較討論セミナー 『比較のなかの移住労働 インドネシア人とベトナム人の経験から』
3. 学会等名 南山大学アジア・太平洋研究センター主催セミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 インドネシア ベトナム比較討論セミナー 『比較のなかの移住労働 インドネシア人とベトナム人の経験から』
3. 学会等名 南山大学アジア・太平洋研究センター主催セミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 平野恵子
2. 発表標題 インドネシア ベトナム比較討論セミナー 『比較のなかの移住労働 インドネシア人とベトナム人の経験から』
3. 学会等名 南山大学アジア・太平洋研究センター主催セミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Junko Nakatani
2. 発表標題 Transformation of Inheritance - Chinese Indonesian Language and Culture
3. 学会等名 30th Anniversary Conference of the founding of the International Society for the Study of Chinese Overseas (ISSCO) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Keiko Hirano
2. 発表標題 Socio-economic impact of the COVID-19 pandemic on paid-domestic workers in Indonesia
3. 学会等名 Psychology From the East, Psychology From the West International Conference 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山口裕子
2. 発表標題 インドネシアの小さな島からグローバルを/に考える
3. 学会等名 岡山県立大学グローバルラーニングセンター 第12回Tech-Talk WEBINAR Tech-Talk Webiner特別講演会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Junko Nakatani
2. 発表標題 Wor-Life Aspirations of Foreign Nurses in Japan Lessons from the Lived Experience of an Indonesian Male Nurse
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Yumi Kitamura, Alan H Yang, Ju Lan Thung.	4. 発行年 2022年
2. 出版社 World Scientific.	5. 総ページ数 404
3. 書名 When East Asia Meets Southeast Asia: Presence and Connectedness in Transformation	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	平野 恵子 (Hirano Keiko) (50615135)	横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授 (12701)	
研究分担者	山口 裕子 (Yamaguchi Hiroko) (70645910)	北九州市立大学・文学部・教授 (27101)	
研究分担者	北村 由美 (Kitamura Yumi) (70335214)	京都大学・附属図書館・准教授 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------